
ねみみに水の吸血樹

沙 亜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねみみに水の吸血樹

【Nコード】

N1431Y

【作者名】

沙 亜竜

【あらすじ】

とある中学校の一年六組の教室を、吸血樹きゅうけつぎと呼ばれ、怖い噂がささやかれる大樹が貫いていた。そのクラスに在籍する、おとなしい女の子、仲良友樹なからゆき。彼女は、お嬢様である松園寺冬野しょうえんじゆのとその取り巻きによって呼び出され、いじめ行為を受ける。

泣きながら教室に戻った友樹の前に、ねみみという少女が現れた。彼女はこの教室にある大樹の精霊なのだという。

精霊の力でクラスの一員となったねみみは、友樹の友達になる。彼

女とともに、友樹は少しばかり穏やかな学校生活を送れるようになったのだが。

辺りには深々とした山影が見え、ちよっぴり寂しい雰囲気が漂っている。

一応関東圏内ではあるものの、都心へと出るためにはかなりの時間を要する、通勤するにはなかなか不便な場所に、とある田舎町があった。

田舎町とはいえ、村ではない。微妙なラインではあるが、そこそこの人数の住民たちが暮らしているようだ。

そんな山間部の田舎町に、ごくごく普通の中学校があった。

この町には、中学校がひとつしかない。だから、町中の中学生が、この中学校に通う。

そのため、田舎町にある古い中学校ながらも、それなりの生徒数を有していた。

どうやら随分と歴史がある、伝統深い中学校らしい。

というわけで、何度も補修工事をされてはいるのだが、オンボロ校舎といった印象は否めない。

そのオンボロ校舎の最上階、四階にある一年六組の教室で、今、ごくごく普通に朝のホームルームが始まるうとしていた。

この学校では、一年生の教室が最上階にあり、下の階に行くに従って学年が下がっていく。

中学校は三年生までなのに、どうして四階まであるのかというと、一階には職員室や保健室などがあるからだ。

校舎としては特別教室棟というのが別にあるのだが、そこは理科室や家庭科室といった特殊な教室のみで構成されている。

今日は暖かい五月晴れの空が一面を包み込み、若干汗ばむくらい
の陽気。

生徒たちがプラスチック製の下敷きをうちわ代わりに風を起こす、
ぺによぺによといった音が教室内にこだましている。

共学の学校ではあるが、まだ小学生気分が抜けていないからか、
そういうことに無頓着なだけなのか、スカートのパタパタと揺らして
涼しい風を送り込む女子もちらほらと見受けられた。

「こら、女子！ はしたないぞ！」

教壇に立つ女性教師が、教卓に両手を着きながら可愛らしい声を
上げて注意を促す。

実際に注意を受けるべきなのは女子の一部だけなのだが、学校と
いう場所は連帯責任が基本なのか、まとめて注意されることが多い。
その際、たいていは女子か男子かで二分される。

まだまだ男子は子供で、女子のほうが成長も早いため少々大人っ
ぽかったりするこの年代。

怒られるのはだいたい男子だったりするのだが……今日は違っ
ていたようだ。

「みんな、シャキツとしなさい！ 若いんだから、五月病なんか
負けてちゃダメだぞ！」

こぶしをぐっと握りしめて力説する教師。

……と、次の瞬間。

へにゃっ、という効果音が背景に見えるほどの動作で、彼女は教
卓にその身を突っ伏してしまう。

「……でも先生はもう若くありません。暑さは正直つらいです。ということで先生はクーラーの効いた職員室に戻ります。みなさん今日も一日頑張ってください。……この暑い中。以上、ホームルーム終わりっ！」

素早くそう言い終えるやいなや、そそくさと教室を出ていってしまった。

「……きりっつ、きをつけ、礼」

すでに先生はドアをピシヤリと閉めて廊下を歩いているところではあったが、一応日直が号令をかけ、ホームルームは終わりを告げる。

あの教師はなんなんだ？ やる気あるのか？

そんな声が聞こえてきそうな状況ではあるが、生徒は生徒で慣れたもの。とくに気にした様子もない。

普段からこんな感じなのだ、あの先生は。

それにしても、五月の陽気であんなふうになっていたのだから、はたして夏になったらどうなってしまうのか。先行き不安としか言いようがない。

森母礼音先生もりもれおん。もう若くないなどと言ってはいたが、まだ二十三歳で、教育大学を出て教師となったばかりの先生だ。

教師生活一ヶ月半程度にして、あそこまでだらけることができるというのは、ある意味すごい才能なのかもしれない。

ここまでの説明と彼女の態度を見る限りでは、ただのダメ教師としか思えないだろう。

ところがどっこい、世の中とは不思議なもので、生徒たちには絶大な人気があったりする。

若い女性教師だから男子に人気がある、というわけではない。いや、もちろん男子にも人気はあるのだが。

ただ、どちらかといえば女子に人気で、友達感覚でつき合える先生という印象のようだ。

適当なところや、のほほんとした雰囲気、彼女たちにウケているのだろうか。

……単純に精神年齢が低いから、本当に友達という感覚になるだけなのかもしれない。

ともかく、ホームルームが終わった教室。

先生がいなくなれば、みんな騒ぎ出すのは世の中の摂理と言っても過言ではないだろう。

もっともあの先生の場合、たとえ目の前にいたとしても生徒を黙らせるほどの威厳があるとは思えないが。

教室内は、まだあどけなさの残る中学一年生たちの明るい声でいっぱいとなった。

そんな教室の片隅、窓際が一番後ろの席に、ひとりの女子生徒が静かに座っていた。

はしゃいだ声が周囲に響く中、カバンからおもむろに取り出した文庫本を読みふける。

それが、仲良友樹なからゆきという名の、どこのクラスにでもひとりはいるような、おとなしい女の子だった。

このクラスにはひとつの大きな特徴がある。このクラスには、と言つより、この教室には、と言つべきか。

ぺら。

休み時間のたびに友樹が文庫本のページをめくる、その乾いた音が微かに響く教室の片隅。

彼女の席のすぐ後ろに、その大きな特徴となっている、あるものが存在していた。

教室の窓側にはベランダに出るためのスライドドアがあるが、後ろにあるほうのドアの、奥側の一枚。その手前に、圧倒的な存在感を持って、それは立ち塞がっている。

教室の床を突き破って伸びる、直径一メートルくらいはあろうかという蛇行したうねりを伴った円筒形の物体。

その物体が、教室の床を突き破って侵入し、そのまま天井までをも貫いていた。

それは、一本の大きな樹の幹だった。

樹齡がどれくらいなのか想像もつかないほどの大樹が、教室の片隅を貫いて立っている。

相当インパクトのある光景に思えるが、慣れてしまえばどうということはないのだろう。五月も半ばともなるこの時期には、すでにクラスの誰も気に留めなくなっていた。

この教室は四階にあるわけだが、その真下にあたる教室は空き教室となつている。三階だけではなく、二階も、一階もだ。

それはもちろん、大樹が貫いているからに他ならない。

大樹は少々うねりながら、校舎を斜めに貫いている。そのため、下の階に行けば行くほど、教室の中央付近に大樹の幹が存在することになる。

というわけで、教室として使用されてはいない。

ただ、教室の数が足りなかったため、教室の隅にしか樹の幹が存在しないここの一年六組だけは、大樹が貫く珍しいクラスとして存在することになったのだ。

この大樹には、少々怖い噂話があった。

よくある学校の怪談の一種、ということになるだろうか。

遙か昔、恋人に捨てられて自暴自棄になった女性が、手首を切つて自殺した。

手首から流れ出た血は一ヶ所に溜まり、そこから一本の樹が生えてきた。

女性の怨念を養分として、その樹は大きく育った。

それがこの教室を貫く樹なのだという。

学校を建てる際に切り倒そうとしたものの、そのたびに天変地異が襲い、結局切り倒すことはできなかった。

工事期間は限られていたため、やむなく樹の上にそのまま校舎を建てた。

教室を貫くように存在するその樹は、最初は物珍しさから生徒た

ちにも歓迎されていた。

しかしいつしか、不穏な出来事が発生し始める。

その樹の近くで恨みのこもった言葉を発した生徒が、次の日には失踪するというものだった。

生徒の失踪があつてからしばらくすると、樹の幹から赤い液体が溢れ出した。

樹に宿った女性の怨念が生徒の恨みの念と同調し、その生徒を幹の中へと引きずり込んだ。そしてそのまま、吸収してしまったのではないか。

そう言われるようになった。

しばらくして、失踪した生徒の遺体が学校の外の林で見つかった。当たり前のことではあるが、生徒の失踪は、この樹のせいではなかったのだ。

しかし結局、犯人は見つからないまま。

その上、樹の幹から流れた赤い液体のこともある。

やがて、失踪した生徒の死因が、失血死だという話が流れ出す。すると生徒たちは次第に、この樹が生徒の血を吸ったんだ、だから赤い液体が流れていたんだ、と噂するようになっていった。

以来この樹は、「吸血樹きゅうけつじゆ」と呼ばれている。

それからもたびたび血を吸われて失踪する生徒がいたと、そんな話が、まことしやかにささやかれていた。

吸血樹の近くでは恨みのこもった言葉を、冗談でも言ったりしないじつ。

今でも生徒たちは、そう言い聞かされている。

そんなおどろおどろしい噂を持つ樹が教室を貫くこのクラス。

入学して最初のホームルームの際には、生徒たちの席は名前の順に並んでいた。

しかし、「名前の順なんて味気ないよね」という先生の提案で、いきなり席替えをすることになった。

そういう場合、普通ならくじ引きなどをして決めるところなのだろうが、そこは適当な森母先生のことだ、面倒な準備なんてするはずもない。

好きな席に座っていいよ、と投げやりに言い放つと、彼女は教室の隅で椅子に座って休憩に入る。

生徒たちは少々面食らいながらも、ま、好きな場所を選んで座っていいこう、と秩序もなにもなく、自然と早い者勝ちで席を取っていくことになった。

そんな中、おとなしい友樹は積極的に動くことができずにいた。どこがいいか決めかね、おろおろしているあいだに、もうすでに最後の一ヶ所しか残っていないという状態になっていたのだ。

こういう場合、教卓の真ん前の席も残ったりしていそうなものだが、担任が若い女性教師だからなのか、その辺りには男子生徒が陣取っていた。

噂の吸血樹がすぐ背後にある席ということに怖がられ、窓際の一番後ろという好条件にもかかわらず、この席だけ残ってしまったのだらう。

そんな経緯で、ここが友樹の席となった。

そしてこの席替えが、友樹にとっての最初の不運となる。

彼女の前の席と隣の席に、男子が座っていたからだ。

引っ込み思案な性格の友樹には、男子に話しかけるなんてことができるはずもない。

反対に隣や前の席の男子はどうだったのかというと、女子と気軽に話すことが恥ずかしいからなのか、やっぱり彼女に話しかけたりはしてこなかった。

だからといって、席を立って他の女子たちが話している輪に入っていくことも、友樹にはできなかった。

その結果、友樹には友達ができず、休み時間は読書に興じるといふ今日この頃になってしまっていたのだ。

彼女の席のすぐ後ろには、吸血樹がそそり立っている。
ぺら。

友樹は不気味さすら漂う大樹を背に、今日もひとり寂しく本を読みふけていた。

学校の机というものは、何年も使われるものだ。

ましてやここは、余分な運営資金もない山あいの田舎町に建つ学校なのだから、それはなおさらだった。

そして、長年使われていると、落書き程度は当然のこととして、授業中の暇つぶしにシャープペンの先などを使って穴を掘られてしまう机も、結構あるものだろう。

友樹の机の端っこのほうには、そんな穴があった。

大きな穴、というわけではない。

ただ少し気になるのは、机の上板を斜め方向に完全に貫いているということだ。

椅子に座って穴に目を向けると、床板のくすんだ木目が見える。

錐やコンパスの針なんかを使って、わざわざ貫通させてできた穴なのだろう。

興味のない暇な時間に、ついつい夢中になって掘ってしまった、そんなところか。

しかし今日の友樹は、その穴についてさらに気になる部分を発見していた。

「あれ？ 穴の周りがすすけてる……？」

友樹がつぶやいた言葉のとおり、彼女の机にある穴は、周囲が少し黒く変色しているようだった。

(昨日までは、黒くなかったと思うけど……)

首をかしげる友樹。

（もしかしたら……これって、いじめ？　ボク、こんな状態だし、いじめられても不思議ではないよね……）

友樹は一旦そう考えてから、それを否定する。

（いじめだったら、こんなわかりにくいし全然害もないこと、わざわざしないよね。きっとボクの気のせいだ。それか、教室掃除の人が雑巾で机を拭いたときに汚れが移ったのかも）

友樹はそう頭の中で結論づけた。

おとなしくて友達もない彼女。

今でこそ、そんな状況に甘んじているが、以前からそうだったわけではない。

友樹は小学校時代、九州地方のとある住宅街に住んでいた。

その頃の友樹は、毎日楽しく小学校に通う、ごく普通の生徒だった。

もちろんそれなりに友達もいて、笑顔をこぼしてはしゃぎ回る活発さすら見せていた。

おとなしい性格自体はその頃から変わっていないのだが、周りの友人たちに引っ張られるように、楽しい輪の中に紛れ込んでいた。

要はタイミングと運、なのだろう。

友樹は小学校を卒業すると同時に、父親の転勤に合わせて今の学校のあるこの田舎町へと引っ越してきた。

そして気分一新、この中学校に入学したものの、タイミングと運が悪かったからか、はたまた神様のいたずらなのか、現在のような状態に陥ってしまったのだ。

とはいえ、友樹にまったく非がないとは言いきれないのかもしれない。

状況を好転させようという努力もせず、本でも読んで静かに過ごしていればいいやと、諦めの境地に自らの身を置いてしまっていたのだから。

そんなある日の、ホームルームの時間。

チャイムが鳴ったと同時に森母先生が入ってきて教壇に立ってもなお、生徒たちは無駄話をやめず、教室内には騒がしい声が反響し続けていた。

みんな席には着いていたものの、後ろを向いたり、隣の席の人と話したり、勝手気ままにはしゃいでいる状態だった。

バンツ！

「こら、みんな！ 静かにしなさい！」

とつても温厚な森母先生ではあったが、さすがに声を荒げる。黒板を平手で叩き、みんなの注目を集めてそう叫んだ先生だったのだが。

生徒たちの騒がしい声は、確かにほんの一瞬は静まったものの、

「わっ！ もりもんが怒った！」

すかさず男子生徒が茶化す声を上げると、どっとクラスが笑いに包まれる。

中学生とはいっても、いや、中学生だからこそか、生徒たちをまとめるのはなかなか大変なようだ。

男子生徒が言った「もりもん」というのは、森母先生のあだ名だ。そのままという感じではあるが、一応由来があった。

なぜかマゲを結った可愛いモンスターの絵が描かれた人気カードゲーム「まげつとモンスター」からつけられたものだ。

モンスターには数値化された強さと、必殺技が書かれてあり、また、属性や特徴づけなどに工夫が施されている。

カードは三枚を一セットとしてチームを組み、特殊カードと合わせて出すことで相手と戦う。

そういうゲームだ。

ゲームのタイトルにもなっている、一番人気の「まげつとモンスター」を筆頭に、かぎっこモンスターとか、まねっこモンスターとか、そういったネーミングのモンスターがたくさんいるらしい。

長い名前がつけられている場合、呼びやすいように略されるのが自然な流れだろう。それはこのゲームでも同じだった。

例えば先ほどのモンスターであれば、それぞれ、マゲモン、カギモン、マネモン、といった感じで略されることになる。

そんなカードゲームが、小中学生を中心に熱狂的なブームとなっていた。

ところで森母先生は、あまり長くない髪を無理矢理ポニーテール

にしている。

しっぽのように垂らすほどの長さはなく、いわばパイナップルみたいな感じだろうか。

それを見た生徒のひとりが、「マゲみたい」と言って囃し立てた。その「マゲ」からまげつとモンスターを連想し、「もりもん」というあだ名がつけられたのも、至極当然の結果だったと言える。

「もりもん言うな〜〜〜!!」

可愛らしい声を上げて、右手のこぶしをブンブンと振り回す森母先生。

そんな言い方をしたら余計に、生徒たちのいたずら心に火をつけるというもので。

「もりもん、もりもん、もりもん!!」

「怒りのもりもんパンチが来るぞ〜!!」

などと、先生をからかう声が続いて繰り返されるのも、ごく自然な展開と言えるだろう。

「がるるるる〜〜!!」

「うあ〜、もりもんファイアーの前兆だ!!」

「逃げる〜!!」

教室には明るい笑い声と、先生の叫び声がこだましていた。

主に子供気分の抜けきれていない男子たちを中心に、若い森母先生をからかって楽しんでいる。

そんな様子も、ごくごくありふれた、このクラスの日常風景だ。

「あはははは……」

笑いの渦に包まれた教室の雰囲気は呑まれ、おとなしい友樹ですらも微かな笑い声をこぼすくらいに、平和な日常だった。

しかし、そんな平和で和やかな空気がこれから徐々に変わっていくことになるうとは、このときはまだ誰も思っていなかった。

帰りのホームルームを終えると、友樹はそそくさと教室を出た。いつもならカバンに教科書やノートを詰め込み、すぐに昇降口へと向かうのだが。

今の友樹は、手ぶらだった。

時間は少しさかのぼる。

トイレから戻つてくると同時に五時間目の休み時間が終わり、六時間目のために教科書とノートを取り出そうとした友樹は、淡い桃色の封筒が入っていることに気づいた。

……え？ これってもしかして、ラブレター？

一瞬そう思つて頬を染めたものの、隠れて中の手紙を読んでみた友樹は、愕然となる。

放課後、ひとりで屋上前に来なさい。

つまりこれは、いわゆる呼び出しというやつだ。おとなしくてクラスで孤立している状態の友樹。そのうちそういうことだってあるかもしれない。友樹本人としても、その可能性を考えていないわけではなかった。でも、実際にこうしてその身に迫ってみると、どうしていいか思い悩んでしまう。

六時間目の授業なんて、まったく頭に入らなかった。思いきって、無視してしまおうか。

一旦はそう考えはしたものの、状況が余計に悪化してしまう可能

性もある。

覚悟を決めて、友樹は呼び出し場所へと向かうことにしたのだった。

手紙には差出人の名前は書いていなかったが、そこに待つのが誰なのか、ある程度の予測はついていた。

移動教室でもなかった休み時間に、机の中へ手紙を忍ばせる。

そんなことができるのは、クラスメイトをおいて他にない。

六時間目の終わりを告げるチャイムが鳴ると同時に、友樹はさりげなく教室内に視線を巡らせていた。

廊下側の席に座っていた元気なサッカー部の男子ふたりが、先生よりも早く教室の前のドアから飛び出した。

あのふたりは、いつも真っ先に飛び出していくから、違うよね。

友樹はそう考えながらも、教室にふたつあるドアへと神経を集中させていた。こういう場合、教室の一番後ろの窓際の席というのは、非常に都合がよかった。

そんな中、続いて後ろ側のドアから四人組の女子が出ていく。

あの四人だ！

友樹は直感的にそう思った。

そのあとは普段どおりの放課後の流れといった雰囲気、あるいは部活に、あるいは家路にと、それぞれがドアをくぐって出ていった。

その流れに紛れるようにして、友樹も教室を出る。そして生徒たちの流れとは逆方向、昇降口へ向かうには遠回りとなる階段へと急

ぐ。
使われることの少ない四階の端のほうにある寂れた階段の、さらに使われることの少ない屋上へと続く上り階段を、友樹は重い足取りで一歩一歩踏みしめていた。

「遅かったわね」

階段を上りきる前に、凜とした声が響いた。
カギがかけられて開かないようになってい、屋上へと出るドアを背に、腕を組んで友樹を見下ろす女子生徒の姿。

彼女は松園寺冬野^{しょうえんていとうの}。全国展開しているデパート「松寺屋^{まつでい}」などを傘下に持つ松園寺グループの社長令嬢だ。

先ほどの声の主は、彼女だった。

彼女の前には家臣のごとく三人の女子がつき従い、友樹に鋭い視線を向けている。

間唯^{まゆい}、大和田幸緒^{おほわださちお}、坂本美春^{さかもとみはる}の三人だ。

いくらクラスに馴染めていない友樹とはいえ、クラスメイトだから名前は覚えていたし、彼女たちがいつも一緒にいるグループだというのも知っていた。

お金持ちのお嬢様と、その取り巻き。彼女たちは、そんな雰囲気だった。

「……なにか用、ですか……？」

同級生だというのに、敬語で言葉を返す友樹。
どんな目的で自分がここに呼ばれたのか、なんとなくは予想がついているのだろう。

だからこそ、無駄な波風は立てないようにしようという心理が働き、敬語での受け答えとなったのだろうが。

しかしそれが余計に、相手を調子づかせてしまう結果となる。

「なにか用ですか、だって！ あはは！」

「ほんと、あんたって暗いよね」

「クラスの雰囲気壊してるのよ、あんたの存在が」

取り巻きの三人が、罵声を投げかけてきた。

「ごめんなさい……」

ついつい謝ってしまう。

おとなしい性格の友樹には、下手に出ることしか対処するすべはなかったのだ。

だが、もちろんそんな友樹の態度も、彼女たちをつけ上げらせる火種にしかない。

「謝って済むんなら、警察はいらないっての！」

個性のかけらもないセリフを吐きながら、美春が友樹の腕をつかんで引き寄せる。

「きゃ……っ！」

友樹はそのまま階段の上へと引っ張られ、待ち構えていたかのよ

うに両手を広げていた幸緒によって、背中から羽交い絞めにされる。

「大声出しちゃ、ダメだからね」

ドアの前から動くことなく、取り巻きたちの行動をただ見守り続ける冬野。

「この子、胸、大っき〜よね〜。いやらし〜」

幸緒が羽交い絞めにしていた手を友樹の胸に押し当て鷲づかみにする。

「や……、ちょ……っと、やめて……ください……」

声を押し殺して身をよじり、友樹はそう懇願する。

もちろんそんな様子も、彼女たちには逆効果になるわけだが、今の友樹にそこまで考えられるような余裕などない。

「写真撮っちゃおう！ 幸緒、ブラ外しちゃえ！」

唯はケータイを友樹に向けて構える。

ケータイの持ち込みは校則違反なのだが、こんな田舎町の中学校とはいえ、実際にはほとんどの生徒が持ってきているのが実情だった。

もっとも、友樹は今どきにしては珍しい、ケータイを持っていない中学生なのだが。

「おっけ〜！」

幸緒は唯に言われたとおり、友樹のセーラー服の裾を強引にまく

り上げると、手を背中に滑り込ませていく。

友樹の両腕は目の前にいる美春によって押さえつけられていたため、身をよじるくらいしか抵抗するすべはなかった。もちろんそれは、無駄な抵抗ではない。

「や……だ……、やめ……て……」

涙目になる友樹に、唯はしつこくケータイのカメラを向ける。

「写真撮ったら、クラスの男子にばら撒いちゃおうか！」

「いいね、それ。あつ。男の先生とかにも、送りつけちゃおう！」

口々に好き放題言いながら、友樹を追い詰める三人の前で、

「う……ぐ……やめ……て……ひっく、ひっく」

友樹はぼろぼろと大粒の涙を流し、泣き始めた。

沈黙の時間が流れる。

抵抗することなく崩れ落ちるほどの友樹の様子に、さすがの取り巻き三人組も少しうろたえ始めていた。

ちよつとからかってやろう、最初はそんなつもりだったに違いない。だが、次第にエスカレートしてしまった。そんなところなのだろう。

大声を上げたりはしていないものの、友樹の涙は止め処なく溢れ出してくる。

ケータイのカメラを向けたままの唯も、セーラー服の中に手を突っ込んだままの幸緒も、腕を押さえつけている美春も、どうしていいかわからなくなってしまったようで、ただ呆然と慌てた視線を友

樹に向けていた。

その様子を落ち着いた面持ちで眺めていた冬野は、すっとドアから身を離す。

「もう、ちょっとした冗談だってば。なに泣いてんのよ」

彼女は三人の取り巻きたちを下がらせると、友樹のセーラー服の裾を引き下ろし、あわらになっっていた肌を隠す。

「松園寺さん……ひっく……」

「言っとくけど、告げ口なんてしたら、ひどいことになるからね？」

冬野は友樹を睨みつけるようにそう言い捨てると、取り巻き三人を従えて逃げるように階段を下りていった。

あとにはただひとり、まだ少し服装が乱れたまま頬を濡らす友樹だけが、ドアの窓から夕焼けの赤が微かに差し込むこの寂れた場所に取り残されていた。

「ひつく……」

夕陽が教室の中を黄昏色に包む。

友樹はとぼとぼと階段を下り、カバンを取りに教室へと戻ってきていた。

勢いこそ弱まったものの、まだ彼女の涙は流れ続けている。

教室にはもう誰も残っていなかった。

そうでなかったら、彼女は涙に気づかれないよう、顔を隠して教室へと入っただろう。

泣き顔を隠すこともなく、友樹はまっすぐ自分の席へと向かう。窓から差し込む夕陽に赤くきらめく雫が、頬を伝ってふた筋の川を形成していた。

夕方とはいえ暖かな五月の陽気、すぐにその川は枯れて見えなくなってしまうに違いない。

誰もいない教室の一番後ろ、窓際にある自分の席に着く。

まだ帰り支度を整えていなかったからだ。

友樹はのそのそとゆっくりとした動作で机の中に手を入れ、教科書とノートを取り出す。

誰もいないはずの教室の一番後ろ、窓際にある友樹の席。彼女の背後には、教室を貫く大樹しかないはずだった。

だが。

すつ……と。

二本の腕が、彼女の首筋から前へと伸びていく。

きゅっ。

二本の腕に抱きしめられた友樹は、背中に確かな温もりを感じていた。

実際に後ろから誰かが抱きしめてくれているかのように。

「大丈夫？」

不意に耳もとで声が奏でられた。

「……うん」

素直に、そして自然に、友樹はその声に答えていた。

「ウチは、ねみみと申しますねん」

目の前の女の子が自己紹介を始めると、思わず友樹のほづも自己紹介を返した。

「はぁ……。ボクは、仲良友樹です」

「あは、自分のことを、ボクって言う女の子なんですのんね。希少価値狙いですのん？」

呆然とした表情を浮かべている友樹に、明るい笑顔を向けて質問攻めを始める、ねみみと名乗った女の子。

自分のことを「ウチ」と言う女の子も、少なくともこの近辺では同じように希少価値ではないかと思うのだが。

それはともかく、返す言葉が見つからない様子の友樹に向けて、ねみみはさらに喋り続ける。

「そうでした。名乗るときには名字というのにも必要なのでしたね。ウチは倉梳^{くらかき}ねみみ。この樹に宿る精霊をやっておりますねん」

「はあ……………は？」

条件反射のように生返事を繰り返していた友樹だったが、ここでさすがに疑問符を飛ばす。

泣き疲れてぼーっとした頭をフル回転させ、必死に考えを巡らせながら、友樹は目の前の女の子をじーっと見つめる。

にこっ。

女の子はそんな友樹に微笑み返した。

この、樹に、宿る、精霊、を、やって、おり、ます、ねん。

さっきのねみみの言葉を、友樹はゆっくりと区切りながら頭の中で反芻する。

後半は助長ではなかるうか、などというツッコミを入れなくなるような思考回路ではある。

しかし今の友樹は、それほどまでに混乱しているということだろう。

もっとも友樹は、普段から少々ズレた思考回路を持った、若干天然ボケ気味な女の子だったりするのだが。

友達になつてくれるという優しい言葉とねみみの明るい笑顔によつて、温かい気持ちに包まれていた。

そのため、この樹が「吸血樹」と呼ばれているという怖い噂話すらも、彼女はすっかり忘れてしまっていた。

次の日、いつもどおりの重い足取りで教室に入ってきた友樹は、教室の雰囲気がいっつもどおりではないことに気づく。

普段から朝のホームルーム前は騒がしいことが多かったが、今日の騒がしさはベクトルが違っているように思えた。

だが、友樹は大して気にも留めず、自分の席へとすたすたと歩いていく。

クラスに馴染めていない彼女にとっては、なにが起こっていたとしても自分には関係ないと決めつけていたのだ。

ただ今回ばかりは、そうもいかなかった。

なぜならば、騒がしい声の発生源が、友樹の席のすぐそばだったからだ。

正確には、友樹の席の後ろということになる。

友樹の席の後ろ。

そう、あの「吸血樹」が床から天井まで貫いている教室の片隅だ。

その樹のすぐ前、友樹の席の後ろに、昨日まではなかったはずの机と椅子が置かれ、ひとりの女の子が座っていた。

学校指定のセーラー服を身にまとう彼女は、昨日友樹がお話した女の子、ねみみだった。

少々幼い外見なのだが、誰もこの学校の生徒だと信じて疑っていない様子。

彼女の周りには、主に男子生徒が集まっていた。

そしてねみみは彼らにグラスを渡し、これにお水を入れて持って

きて、とお願いする。

お姫様に仕える従者よろしく、ひとりの男子がそのグラスを手を取って足早に教室を出ていった。

「ねみみ様、他になにか御用はありませんか？」

「そうねえ〜。お菓子が食べたいですのん。なにかお持ちじゃありませんですか？」

「あつ、おれ、チョコ持ってきてるよ！」

「……うくん、溶けかけてますのん。いらないます」

「ごめんなさい、ねみみ様っ！」

そんな状況が目の前で展開され、思わず口をだらしなく開け放ち、呆然と立ち尽くしてしまう友樹。

と、彼女の横を、大急ぎの男子が通り過ぎる。

「はいっ、お持ちしました、ねみみ様！ お水です！」

「ありがとうございますのん」

先ほどグラスを渡された男子が駆け足で戻ってきたのだ。

グラスを受け取ったねみみは、中の水を美味しそうに飲み干す。

「ごきゅ、ごきゅ、ごきゅ、ぷふあ〜！ やっぱ、お水は最高ですのん」

「はいっ、水は最高です、ねみみ様！」

友樹は……とりあえず現実から目を逸らして、黙ったまま自分の席に着くことにした。

すぐにチャイムが鳴り、ねみみの周りを囲っていた男子も散り散りに席へと戻る。

じきに森母先生が教室に入ってくるだろうという、微妙な空き時間。

つんつん。

(……無視しないでほしいですのん)

指で友樹の背中をつつきながら、ねみみが背後から小声を投げかけてくる。

現実から目を逸らしている最中の友樹は、どうするべきか迷いの淵に立っていた。

(む)。無視されるとウチ、のどが渴きますねん。水がないとなると、赤い液体を欲してしまいますのん)

(……ちよつと、あなた、なにしてるのよ？ それに、さっきのはなんなのよ?)

ねみみの不穏な発言に、友樹は慌てて振り向くと、とりあえず注目を受けないように小声でねみみに話しかける。

その様子を見て、ねみみは満足そうに笑みをこぼした。

(あは、ウチ、このクラスの生徒になってみましたのん。精霊であるウチの力を持ってすれば、これくらい朝飯前ですねん)

誇らしげ言つてのけるねみみ。

(それはべつにいいんだけど……。ねみみ様ってなによ？ お姫様
気取り？ 水まで持ってこさせてさ)

皮肉を含んだ友樹の言葉に、ねみみはちよつとムツとした表情を
浮かべる。

(いいじゃないですか。お姫様は女の子の憧れですのん。それに、
ウチにお水は必須なんですねん。ウチは樹ですから。この教室から
出たりもできない、不憫な身の上なんですのん)

(……そうなんだ)

(そうです。だからこそその、マイグラスですねん。今後も定期的に
水を飲ませてほしいですのん)

(わかったわ。でも、だからって、あれはさすがにないよ。ボクが
水を持ってきてあげるから、男子を使ったりしないでね。もっと普
通の中学生っぽく振る舞わないと、伐採されちゃうかもよ?)

(はう、伐採はイヤですねん！ む、わかったですのん)

(よろしい)

友樹はこうして会話をしながらも、無意識に現実から逃避してい
た。

つまり、ねみみが「吸血樹」に宿る精霊であるということも、そ
んな彼女がなんの目的でこんなことをしているのかということも、
一切気にしないようにしていた、ということだ。

「こら、仲良さん。前を向いて！ ほら、倉梳さんも。先生が入っ
てきたら、お喋りはやめなさい！ ……それじゃ、ホームルームを
始めます」

いつの間にか教室に入ってきていた森母先生の注意を受けて、現
実に引き戻された友樹は前を向く。

どうやら先生も、ねみみの存在に疑いを抱いてはいないようだ。精霊の力とやらを使って完全にクラスに溶け込んでいるのだろう。

そんな状況ではあったが、友樹はなんとなく安らいだ気持ちになっ
っていた。

教室の中でこうやって誰かと無駄話に花を咲かせるのも、この中
学校に入って以来、初めてのことだったからだ。

「明日からお友達になってあげますねん」

確かにねみみは昨日、そう言っていた。

そして今日、本当にその言葉どおりになっている。

一緒に泣いたり笑ったりできる友達がいること、それは生きてい
く上でとても大切な要素となるだろう。

そんな友達が、昨日までの友樹にはいなかったのだ。

得体の知れない相手とはいえ、ねみみに心を開き、すがってしま
ったのも、当然の成り行きだったのかもしれない。

あるいはそれを、ねみみは狙っていたのか。

ともかくねみみは今、友樹の友達として、教室の片隅にある席に
座って授業を受けている。

友樹にとっては、明るく楽しい未来が両手を広げて待つてくれ
ている、そんなふうになら感じられた。

こうして友樹は、久しぶりに穏やかな気持ちで授業に臨むのだっ
た。

そんな教室の中。

(なにか、おかしいわ……)

誰もが違和感なくねみみの存在を受け入れているように思えたが、ただひとり。

彼女だけは、納得がいかないといった表情を浮かべ、首をかしげていた。

休み時間になって、後ろの席のねみみと楽しくお喋りしている友樹の姿を、じっと見つめる彼女。

「冬野、どうしたの？」

「べつに……なんでもないわ」

そう答えながらも、松園寺冬野は怪訝な表情を崩すことはなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1431y/>

ねみみに水の吸血樹

2011年11月2日02時03分発行